

筑波大学日本文学会会報

第21号

1997年1月

御あいさつ	桑原博史	一
桑原先生を お送りするにあたって	池内輝雄	二
日本文学会だより		三
研究室だより		五
教官新刊紹介		九
卒業生だより		一〇
日本文学会教官学生名簿		一三

御あいさつ

桑原博史

大変にしあわせな形で、大学の専任教員としての最後の日々を送っている今、最初に最後の御あいさつを書こうとすると、さすがに傷的な気分になる。

定年後、妻と二人で痴呆症の老母の看護をするつもりでいたところ、まことに親というのは子ども孝行であって、わずか一週間寝ただけでこの世から去ってくれた。私ども夫婦にありがたい自由時間のプレゼントをしてくれたのである。

もともと人前へしゃしゃり出ることが苦手な私は、もう二、三年前から、若い先生がたに日本文学関係の雑務一切をお願いしてきた。若い先生がたは生き生きと働いて下さって、私はとくに大学にいてもいなくてもよい存在になれたのである。

数年前から、学内のさる先生・事務官の方々と、夕方から月一回の俳句会を持ちつづけていた。ふしぎなことに、もっとも熱心な三人が同年令であるため、これも平成九年三月をもって解散となる。私自身は刺激を受けて、ある結社にはいり、いずれは同人となつて別の人生を歩むことになる。

その俳句のおかげで、つくば市周辺の美しく古い集落を、自転車時には卒業生の自動車毎週のようにまわった。養蚕や煙草の生産

など、このつくば市において私ははじめて見たのであって、地元の人たちが、私を誰とも知らずに見せて下さった好意は、生きていくかぎり忘れないであろう。

まだあと数年は、私を必要としてくれる古典文学の愛好者の人たちと、古典を読む時間に恵まれるであろう。東京教育大学筑波大学を通じて触れ合った、若い教え子のみなさん、どうぞお元気で、また私以上にしあわせでいて下さるよう。

桑原先生をお送りするにあたって

池 内 輝 雄

桑原博史先生が、この三月をもって定年でご退官になる。

先生は、東京教育大学文学部文学科（国語国文学専攻）、同大学院博士課程文学研究科（日本文学専攻）に学ばれ、東洋大学文学部の教壇に立たれた後、一九六八年四月、母校の助教授に就任された。一九七四年、筑波大学の開学にともない、助教授、八〇年からは教授として、東京教育大学以来二十九年間、筑波大学となってからも二十三年間という長い年月を八茗溪の水に連なる後進の指導に当たってこられた。先生がお去りになるのは、日本文学コースにとってたいへんなマイナスであり、残念至極である。

私ごとで恐縮だが、先生が東京教育大学助教授となられたとき、私は大学院に在籍しており、まもなく助手になったので、若き日の先生（今でもあまりお変わりないが）に接する機会が多かった。先生がはじめて私どもの前に姿を現されたときは、たしか、さわやかなブルーのスーツを召されていたと思う。どぶねずみ色の諸先生方のいでたちにくらべ、なんとセンスのいいことだったか。それに、先生は多趣味であったようだ。研究室で当時助手の奥野純一氏と囲碁を楽しまれ、毎土曜日には六大学野球の観戦に出かけられた。誤解のないように言えば、研究者として論文を旺盛にお書きになり、大学の雑務をこなされたうえである。

雑務といえば、「国文学 言語と文芸」（東京教育大学国語国文学会編、隔月刊）の編集委員長を中田祝夫先生に継いで担当され、一九六八年より七一年までの三年間に十七冊（59号～75号）を出された。同誌が学界の一流専門誌として成長を遂げたのは、歴代編集委員長の小西甚一、尾形仂、鈴木一雄諸先生方のご尽力もさることながら、桑原先生の長期にわたるご苦勞によるところ大であった。

このことは、もっと皆の記憶に留められていい。

中古・中世文学の研究者としての先生のご業績は、その方面に暗い私などが記すのは恐れ多いが、ご著書に限っても大著『中世物語の基礎的研究・資料と史的考察』（風間書房、一九六九）『西行とその周辺』（同、一九六九）をはじめ、新潮日本古典集成の校注『無名草子』（新潮社、一九七〇）、講談社学術文庫の全注釈『西行物語』（講談社、一九八二）、同じく『おとぎ草子』（同、一九八二）、私家集全積叢書『源道済集全積』（風間書房、一九七〇）、中世王朝物語全集『住吉物語』（笠間書院、一九七五）など、枚挙に暇ないほどである。

先生の学問姿勢は、たとえば、最近刊の『住吉物語』に関する「『住吉物語』総体に柔軟に対応し、かつ徹底した読み取り」という評（豊島秀範「平成七年 国語国文学界の展望 物語・草子・小説」、「文学・語学」一九八・二〇）によく言い表されています。それはまた、先生の教育者としてのお人柄でもある。

先生は、今、句作に凝っておられるようだ。四月からは句吟旅行など、悠々自適のお暮らしをなさるのだろうか。これからはますますお健やかに、私どもをやさしく、きびしくお導きくださることを願ってやまない。